

第24回 歌人 河野裕子さん

立命館大の公開講座「日本文化の奔流」(読売新聞大阪本社後援)第24回は、歌人の河野裕子さんが、「歌を詠むことと読むこと」と題して、短歌を紹介しながら作家としての持論を語った。

50年間、短歌を詠んできましたが、短歌という詩型の奥行きと深さが少しは分かりかけてきたような気がします。5、7、5、7、7というたった31文字の世界ですが、鋭く深く人のところに入って来るのはなぜなのでしょうね。韻律が意味を越えて訴えてくるからなのでしょう。

千数百年もの歴史を持つ詩型は世界でも類例を見ないと思います。どの新聞にも短歌や俳句の欄があって、誰でも投稿できますが、このような国民が皆詩人になれるということも、やはり世界中見渡しても無いのではないのでしょうか。

この頃、特に感じるのですが、日本語が軽く薄っぺらなものになってきたように思います。書きことばも話しことばも。それが読む力を弱めてしまっているのではないか。短歌のような定型詩では、文語を使い、てにをは、つまり助詞や助動詞をたいせつにして作ります。そして、てにをはを丁寧に読めなければ歌は読めないところがあります。



かわの・ゆうこ

1946年熊本県生まれ。京都女子大文学部卒。大学在学中に角川短歌賞を受賞し、現代歌人協会賞、若山牧水賞、空賞などを受賞。歌集に「母系」「葦舟」など14冊。歌人の夫、永田和宏(京都大学再生医科学研究所教授)が主宰する短歌会「塔」の選者を務める。長男の永田淳、長女の永田紅も歌人。

短歌は作ることもだいじですが、^ま先ず読めること。これがなかなかできないのですね。

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に 石川啄木

この歌を初めて読んだ時、わたしにはこの歌の意味がわかりませんでした。「都の雨に」がなぜ不意に使われているのか？

馬鈴薯のあのうす紫の花に降っていた故郷の渋民村に降っていた雨を思い出すよ。都に降る雨を見ていると。そんな意味の歌なんです。短歌は短いから、ことばを経済的に使ったり、省略したり、飛躍させたりして思いを伝えなければならぬので、読みなれないと意味さえ分からないことがとても多いのです。

たつぷりと真水を抱きてしづもれる^{くら}昏き器を近江と言へり 河野裕子

これはわたしが20代の終わり頃に作った歌です。結婚して東京に行きましたが全然なじみませんでした。自然が無かったから。その時、離れてみて初めて見えてくる、感じら

れる風土というものがあることに気づかされました。近江は真夏でも、どこかし一んと暗くて静かだった。ああ、それは近江という風土が、たつぷりとした真水を、琵琶湖を抱いていたからなんだと気がつきました。そんな近江の地を「昏き器」と表現してみたのです。

実は、わたしは10年前に乳癌^{がん}の手術を受けました。一昨年の夏に転移、再発し、今は化学療法を受けております。副作用は、やはりそうとうに辛いです。発病から現在に至るまで『文藝春秋』の今年1月号に娘の紅と往復書簡のかたちで書きました。

病気になってから思いますことは、歌を作ることは、誰に訴えても、どんな本を読んでも、どうにもならない悲しみや苦しみを治す力を持っているということでした。

短歌を50年続けてきてほんとうに良かったと、しみじみ実感しております。

若やかな乳房とともに衰ひし時間はまたの生を生き来し時間

最新歌集『葦舟』の中から引いてみました。病気にならなかったなら、わたしにはまた違った時間や人生があっただろうという思い。一度きりの人生、最後まで歌を作り続けることができればと思っております。

(2010年02月26日 読売新聞)